

## 抽象物への関心と知覚反応検査における極端反応

辻本 英夫

大阪市立大学

### 問 題

尺度内容とは独立に多段階評定尺度の両端の段階を好んで選択するという反応スタイルである極端反応傾向 (Extreme Response Style; ERS) は、経時的に安定した傾向であることから、何らかの内的要因に規定されているものと考えられている (Hamilton, 1968)。これまでに、ERS の規定要因を探る試みは数多くなされてきたが、それらの研究の多くは方法論上の問題点を有している (Hamilton, 1968; Clarke, 2000)。特に問題視される点は、ERS の測定に他の目的で開発された尺度が流用されているために、ERS が正確に測定されていない可能性があるという点である。

このような指摘を受け、辻本 (1999, 2003) は、ERS 測定用の尺度をもちいて ERS を測定し、ERS と 5 因子モデルによる性格特性との関連を検討し、一貫して、ERS と遊戯性・開放性の間に正の相関を見出すとともに、遊戯性・開放性の、規範にとらわれない自由な態度表明といった個人主義傾向的側面が、明確な態度表明と考えられる極端な段階への反応につながるのではないかと解釈を示した (辻本, 2003)。さらに、この解釈を部分的に支持する結果として、ERS と「自由奔放」と解される特性との間に有意な正の相関を見出している (辻本, 2006)。

このような解釈とともに辻本 (2003) はまた、対象への関与・関心が ERS の規定要因の 1 つではないかと考えられている (O'Donovan, 1965) ことから、辻本 (1999, 2003) で見られた ERS と遊戯性・開放性の間の関連は、抽象的な対象への関与・関心という点からも説明可能かもしれないと述べている。遊戯性・開放性の高い人の特徴の 1 つとして、芸術に代表される「非日常的な経験」(辻, 1998) に対する関心・感受性の強さという点が挙げられるが、辻本 (1999, 2003) で ERS 測定に使用された知覚反応検査・語反応検査で刺激として用いられている抽象的なシンボルや無意味語は、日常目にしないという意味では非日常的なものである。故に、遊戯性・開放性の高い人は抽象的なシンボル・語に対してよりも関心・感受性が高く、そのためにこれらの尺度でより多くの極端反応を示すとも考えられる。辻本 (2003) が示唆したこの解釈を検証するために、本研究では、一般の大学生よりも芸術に対する関心・感受性が高いと考えられる芸術大学の学生と総合大学の学生との間で、知覚反応

検査での極端反応に違いが見られるかどうかを比較検討する。芸術大学学生が一般の大学生よりも、遊戯性、中でも芸術への関心が高いことは、藤島 (1998) によって示されている。

### 方 法

#### 調査対象者および手続

調査対象者は、関西地方の芸術大学および総合大学の学生である。いずれも、心理学関連科目の授業時に、後述する知覚反応検査 (PRT) と 5 因子性格検査 (FFPQ) の遊戯性尺度を実施した。調査対象者は、芸術大学学生 102 名 (男性 50 名, 女性 49 名, 不明 3 名)、総合大学学生は 135 名 (男性 73 名, 女性 62 名) であった。また、両尺度の有効回答数は、芸術大学では PRT96 名 (男性 47 名, 女性 47 名, 不明 2 名)、FFPQ92 名 (男性 43 名, 女性 46 名, 不明 3 名)、総合大学では PRT127 名 (男性 68 名, 女性 59 名)、FFPQ126 名 (男性 67 名, 女性 59 名) であった。

#### ERS 測定尺度・特性尺度

辻本 (2003) と同様、ERS の測定には知覚反応検査 (Perceptual Reaction Test; PRT) を使用した。PRT は、辻本 (1998) によって ERS の測定のために構成された尺度であり、60 個の抽象的記号 (シンボル) に対する好悪を 5 段階で評定させるものである。この PRT への回答から、ERS 測度として従来一般的に使用されている極端反応数と偏差得点を求めた。極端反応数は、PRT 60 項目のうち、両端の段階が選択された項目の度数であり、偏差得点は、PRT の項目ごとに、中央の段階を選択した場合を 0 点、その両隣の段階を選択した場合を 1 点、両端の段階を選択した場合を 2 点として得点化された項目得点の合計である。また、遊戯性の測定には、5 因子モデルに基づく代表的な性格検査の 1 つとして市販され広く用いられている 5 因子性格検査 FFPQ (FFPQ 研究会, 1998) を用いた。本研究では、著者の許可を得て、FFPQ 全 150 項目の中から遊戯性に関わる項目のみを抜き出して、あらためて遊戯性尺度として構成したものを使用した。回答方法は 5 件法である。

### 結 果

Table 1 に、芸術大学学生と総合大学学生の ERS 得点の平均値・標準偏差を示した。両者の平均値を比較してみると、

**Table 1** ERS 得点の平均値・標準偏差

ERS 測定	芸術大学生 平均 (SD)	総合大学生 平均 (SD)	差
極端反応数	15.1 (12.78)	13.0 (10.07)	2.1
偏差得点	56.2 (21.26)	53.5 (17.52)	2.7

**Table 2** 遊戯性尺度得点の平均・標準偏差

尺度	芸術大学生 平均 (SD)	総合大学生 平均 (SD)	差
P 遊戯性	111.6 (11.67)	107.0 (15.02)	4.6*
P1 進取	21.8 (3.08)	21.0 (3.96)	.8†
P2 空想	23.1 (3.65)	22.5 (4.30)	.6
P3 芸術への関心	21.5 (3.66)	19.7 (4.82)	1.8**
P4 内的敏感	23.4 (3.75)	23.0 (4.60)	.4
P5 奔放	21.8 (3.80)	20.9 (3.84)	.9†

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

極端反応数 (芸術大学生  $M=15.1$ , 総合大学生  $M=13.0$ ), 偏差得点 (芸術大学生  $M=56.2$ , 総合大学生  $M=53.5$ ) とも, 総合大学生よりも芸術大学生の平均値の方が高いという傾向がうかがえるものの, 有意差は認められなかった ( $t(175)=1.32, n.s.$ ;  $t(221)=1.03, n.s.$ ).

芸術大学生と総合大学生別に, 遊戯性尺度ならびにその下位尺度の得点の平均値・標準偏差を示したのが Table 2 である。遊戯性で, 芸術大学生と総合大学生の平均値間で有意差が得られ (芸術大学生  $M=111.6$ , 総合大学生  $M=107.0$ ;  $t(215)=2.55, p < .05$ ), 芸術大学生の方が総合大学生よりも遊戯性が高いという結果となった。同様に, 芸術への関心においても平均値間に有意差が認められ (芸術大学生  $M=21.5$ , 総合大学生  $M=19.7$ ;  $t(215)=3.19, p < .01$ ), 芸術大学生の方が総合大学生よりも芸術への関心が高いことが示された。また, 進取, 奔放の両下位尺度についても, 5% 水準では有意とはならなかったものの, 芸術大学生の方が総合大学生よりも平均値が高いという傾向がうかがえる。

最後に, ERS と遊戯性との関連を確認するために, ERS 得点と遊戯性尺度得点の相関係数を求めた。その結果, 有意な相関が見られたのは, 芸術大学生における偏差得点と遊戯性 ( $r=.24, p < .05$ ), 空想 ( $r=.23, p < .05$ ), 内的敏感 ( $r=.28, p < .01$ ) の各尺度得点の間のみであった。芸術大学生における極端反応数, 総合大学生における極端反応数・偏差得点については, 遊戯性尺度およびその下位尺度のいずれについても, 有意な相関が示されなかった。これまでの辻本 (1999, 2003) の結果とは異なり, ERS と遊戯性との関連を明確に示唆するような結果は得られなかった。

### 考 察

本研究では, 知覚反応検査 (PRT) や語反応検査で測定さ

れる ERS と遊戯性・開放性との間に正の関連が見られるのは, 遊戯性・開放性がかつて非日常的对象への関与・関心によるのではないかと、という辻本 (2003) の示唆について検討するために, 芸術大学生と総合大学生との間で, PRT で測定される ERS に違いが見られるかどうかを分析した。遊戯性尺度, ならびにその下位尺度である芸術への関心の平均値の差の検定からは, 芸術大学生が総合大学生よりも有意に高いという結果が得られたものの, ERS 測定である極端反応数と偏差得点の平均値については, 芸術大学生と総合大学生との間で有意な差は得られなかった。すなわち, 非日常的なものとしての芸術に対する関心・関与がより強い芸術大学生が, 総合大学生よりも極端反応が多いことを示すような結果は得られず, PRT や語反応検査で測定される ERS と遊戯性・開放性との関連が抽象的对象に対する関与・関心の高さに起因するのではないかと、いう辻本 (2003) の示唆を積極的に支持する結果とはならなかった。

また, 本研究では, 過去の研究で見られたような ERS と遊戯性との間の関連が示されなかった。辻本 (1999, 2003, 2006) では両者の関連は一貫して認められていることから, ERS と遊戯性との間に関連が見られなかったというこでの結果は標本変動によるものかもしれない。さらに追試を重ね, 同様な結果が安定して得られるかを確認していく必要がある。

### 引用文献

Clarke, I. (2000). Extreme response style in cross-cultural research: An empirical investigation. *Journal of Social Behavior and Personality*, **15**, 137-152.

FFPQ 研究会 (編) (1998). FFPQ (5 因子性格検査) マニュアル 北大路書房

藤島 寛 (1998). FFPQ と芸術との関係 辻平治郎 (編) 5 因子性格検査の理論と実際——こころをはかる 5 つのものさし—— 北大路書房 pp. 210-217.

Hamilton, D. L. (1968). Personality attributes associated with extreme response style. *Psychological Bulletin*, **69**, 192-203.

O'Donovan, D. (1965). Rating extremity: Pathology or meaningfulness? *Psychological Review*, **72**, 358-372.

辻平治郎 (編) (1998). 5 因子性格検査の理論と実際——こころをはかる 5 つのものさし—— 北大路書房

辻本英夫 (1998). 極端反応傾向測定尺度 WRT・PRT 日本語版の信頼性・妥当性の検討 性格心理学研究, **7**, 33-41.

辻本英夫 (1999). 極端反応傾向と 5 因子モデルによる性格特性との関連 人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), **51** (10), 79-90.

辻本英夫 (2003). 極端反応傾向と開放性・遊戯性・外向性 パーソナリティ研究, **12**, 14-26.

辻本英夫 (2006). 極端反応傾向と個人主義関連特性との関連 パーソナリティ研究, **14**, 293-304.

## **Interest in Abstracts and Extreme Responses on the Perceptual Reaction Test**

Hideo TSUJIMOTO

Osaka City University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15 No. 2, 240–242

Previous studies found that playfulness/openness of personality trait correlated positively with extreme response style (ERS), the tendency to use frequently extreme alternatives of a rating scale for any specific item content. Tsujimoto (2003) suggested that one's interest in abstracts might mediate the both. In the present study we examined the differences between art and university students in ERS to explore his suggestion. The results showed that there was no significant differences between the both groups on the mean of ERS scores.

**Key words:** extreme response style, interest in abstracts, the Perceptual Reaction Test